

PCV2感染精液での実験感染の報告

～子宮内感染を起こすか？一般農場での感染の可能性～

母豚を2群に分けて、一方にPCV2ウイルスが確認された精液パックを子宮内注入したところ、母豚が低い抗体しかもっていない場合には注入後わずか2日でウイルス血症が確認されました。母豚を適当な時期に殺処分し、胎盤や胎子などを病理的に詳しく検査したところ、以下のことが分かりました。

- ① PCV2感染は子宮内注入で成立したが、通常の頸管ルートでは感染しなかった。
- ② 胎盤、胎子に病変が見られ、その結果としてサーコ感染を起こし胎子が死亡するものと思われた。
- ③ しかし、胎子がすべて感染するわけではないので、診断を確定するためには胎子を腹ごと送らなければ不明確の恐れがある。
- ④ 母豚が一定レベルの抗体を持っていれば、胎盤感染しないことがわかった。

通常行われているAI(頸管注入法)ではたとえ雄豚がサーコ感染をして精液に菌が混じるようなことがあってもなかなか感染しないようです。ましてやサーコの免疫も重要として、最低でも繰り上げ時にワクチン接種などしている場合には、速やかに免疫反応が起こるので、連続して流産死産が見られるなど、大きな被害はなさそうです。特に流産時あるいは分娩時に異常な子豚が生まれた時は、死産やミイラも含めてPCRを検査する必要があるようです。

一般のコマーシャル農場でPCV2の繁殖障害はなかなか起こり得ないことを実証した実験です。イタリアのボローニャ大学と母豚ワクチンを製造する会社の共同研究報告です。やはりメーカーの方針に根ざした研究報告と思われませんが、母豚への免疫をしっかりつけておくことが安定生産の要因と解釈できる研究内容と言えるでしょう。

(Sarli G et.al, IPVS2010 より)

2010年9月 グローバルピッグファーム(株)